

《史料研究》

CIE 史料に残された「世界史」教科書の英語原稿について —1950年実施の「世界史」教科書検定の経緯に対する検討—

茨木 智志

はじめに

本稿は、戦後教育改革期における占領軍のCIE(民間情報教育局)の史料に残されている「世界史」教科書の英語原稿について考察し、そこから確認できる1950年実施の「世界史」教科書検定の経緯を検討するものである。

世界史教育の検討の基盤には、その歴史的展開に対する共通認識を欠かすことはできない。しかし、高校社会科「世界史」の教育はその出発点から不明確な部分が多いのが、研究上の現実である。特に、1952年4月に「世界史」検定教科書の使用が開始されるまでの時期における「世界史」教科書については、制度と実態の乖離が甚だしく、十分な解明が及んでいない。

本稿では、CIEの史料に残されている3種5冊¹の「世界史」教科書の英語原稿を取り上げる。これがいかなるものであるのか、「世界史」教科書の検定や発行、非公式な存在であった「世界史」準教科書の発行などにどのように関連しているのかを明確にする必要がある。この3種の「世界史」教科書の英語原稿への考察を通じて、特に1950年に実施された「世界史」教科書検定の経緯を検討していきたい。

なお、調査には国立国会図書館憲政資料室所蔵のマイクロフィッシュに撮影されたものを利用した。

1. 教科書検定制度の開始と「世界史」教科書

本稿で取り上げた3種の「世界史」教科書の英語原稿は、後述するように、1951年度用の「世界史」検定教科書として使用するために、1950年に検定申請用に提出されたものである。ただし、これらは結果的には1951年度用の教科書目録に記載されなかった。

はじめに、新科目であった「世界史」に関わり、その教科書がどのような状況であったのかを確認する。

1948年4月に発足した新制高校では、社会科の選択科目として「東洋史」と「西洋

¹ 教科書の数え方について、本稿では基本的に「種」(種類数)と「冊」(冊数)を分けて用いる(例:上・下2「冊」の教科書は1「種」となる)。ただし、史料によって「点」や「部」などが用いられている場合は、そのまま使用した。

史」が実施された。「東洋史」と「西洋史」は、旧制中等学校で、敗戦後に停止されることなく継続的に授業が実施されていたものであった。それぞれの一種検定本教科書と学習指導要領が編集され、学習指導要領は発行されたが、教科書については4冊の中の『西洋の歴史(1)』のみが発行されて、他は発行が停止されていた²。このような中で、1948年10月に、高校の教科課程改正が発表されて、翌年度から「東洋史」・「西洋史」は「国史」(実施時には「日本史」と改称)・「世界史」となることになった³。1949年4月に「世界史」授業が始まる。しかし、「世界史」の学習指導要領も教科書も存在しなかった。実施時の通達では「教科書として現在刊行されているのは、西洋の歴史(上)のみであるから他は教授者によつて適当に考慮されたい⁴」と文部省も教師に指示せざるを得なかった。

教科書については、1949年4月から文部省著作教科書(一般に「国定教科書」と呼ばれた)に加えて、検定教科書の使用が始まっていた。このときの検定教科書は、前年の1948年4月終わりに検定教科書受付の公開とその日程を発表して、6月に原稿を受理し、7月中に審査を終えて、8月下旬の教科書見本展示会を開くという大変に慌ただしい経緯で登場したものであった⁵。提出された申請原稿584点中、教科書目録印刷に間に合ったものは63点に過ぎず⁶、しかも社会科の検定教科書は皆無であった。このような時期に「世界史」の授業は始まった。教科書がないという状況であったため、正式な意味での教科書ではないながらも、「世界史」学習のために生徒が使用する書籍(「世界史」準教科書と称する)が、1949年以後に数多く発行されることになった⁷。

一方で、文部省は、1949年4月の「世界史」実施の前から、「世界史」検定教科書を1950年4月には教室に届けるための施策に着手していた。まず、「世界史」設置を発表した直後である1948年10月に「昭和二十五年度以降使用教科用図書検定受付種目」を告示して、1950年度以降に使用される検定教科書の申請受付に「世界史」を含めた⁸。同時に、「世界史」教科書検定基準の作成を開始し、1949年3月に「補遺」と

² 『西洋の歴史(1)』(著作兼発行者:中等学校教科書株式会社)は、1947年8月3日付で発行された。本書のキリスト教記述が問題とされ、残りの『西洋の歴史(2)』、『東洋の歴史(1)』、『東洋の歴史(2)』の発行は停止された。

³ 「新制高等学校教科課程の改正について」、1948年10月11日、発学第448号。

⁴ 「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」、1949年4月11日、発教第247号。「11日」という日付は、『文部時報』第861号(文部省調査局、1949年6月、44頁)による。引用は、文部大臣官房総務課『昭和二十六年三月 文部行政資料 終戦教育事務処理提要 第五集』(1951年3月、386頁、国書刊行会復刻、1997年)による。

⁵ 水谷三郎編『教科書懇話会の歴史』教科書懇話会清算人、1961年、41～43頁。

⁶ 同上、44～45頁。

⁷ 「世界史」準教科書については、吉田寅「『世界史』成立前後の教科書・準教科書について」(『立正大学人文科学研究年報』第28号、立正大学、1991年3月)、および茨木智志「準教科書に見る初期の世界史教育の模索」(『社会科教育論叢』第47集、全国社会科教育学会、2010年11月)などがある。

⁸ 「昭和二十五年度以降使用教科用図書検定受付種目」、1948年10月15日、文部省告示第85号(同日、『官報』第6527号)。ここでは、「A五判」にて400頁までとされている。

して告示していた⁹。

1949年8月の教科書見本展示会に向けての1950年度用の教科書の「検定合格率は著しく向上し¹⁰」た。しかし、「世界史」検定教科書は皆無であった。そのため、1949年8月発行の1950年度用の教科書目録では、『東洋の歴史(1)』・『東洋の歴史(2)』と『西洋の歴史(1)』・『西洋の歴史(2)』が引き続いて掲載された¹¹。この「東洋史」「西洋史」教科書の教科書目録への記載は、「副教材」もしくは「補助教材」としての使用を文部省が意図したものであったが、結局のところ発行は実現しなかった¹²。

その後、1951年度用教科書の準備が進められた。文部省は1949年8月には「昭和二十六年度以降使用図書検定受理種目」を告示し¹³、同月に出版社に対して9月末までに検定申請の予定の提出を求めた¹⁴。10月の時点での文部省からCIEへの報告によると、「世界史」では6種の検定申請の予定が提出された¹⁵。1951年度用の教科書見本展示会は、従来よりも早めの6月上旬に開催されることになり、これにより検定も早めに進められた。1950年4月に検定審査の結果が発表された。提出された申請原稿867点の内、社会科教科書を含めた約80%の667点が検定に合格したが、「世界史」は7点の教科書原稿が申請されて、合格したものは一つもなかった¹⁶。検定に合格した「世界史」教科書が皆無であったため、1950年4月に発行された1951年度用の教科書目録には、引き続き「東洋史」「西洋史」教科書が掲載された¹⁷。ただし、前年度と同様に、これらの発行は実現しなかった。教室では、引き続き「世界史」の準教科書が使

⁹ 1949年3月の「教科用図書検定基準」の一部改正における「別紙第二 補遺」に「世界史」教科書の検定基準が初めて提示された(1949年3月22日、文部省告示第20号。同日、『官報』第6654号)。なお、1949年2月には「東洋史」「西洋史」で教科書検定基準が告示されていた(「教科用図書検定基準」、1949年2月9日、文部省告示第12号。同日、『官報』号外第15号)。「世界史」教科書の検定基準については、茨木智志「成立期における「世界史」教科書検定基準に関する基礎的考察」(『歴史教育史研究』第7号、歴史教育史研究会、2009年12月)を参照されたい。

¹⁰ 水谷三郎編・前掲『教科書懇話会の歴史』、55頁。

¹¹ 文部省『昭和二十四年八月 昭和二十五年度使用高等学校普通学科用教科書目録』、1949年8月。

¹² 『西洋の歴史(2)』および『東洋の歴史(1)』『東洋の歴史(2)』の内容等については、茨木智志「中等社会科「西洋史」教科書『西洋の歴史(2)』の英語原稿についての基礎的考察」(『総合歴史教育』第47号、総合歴史教育研究会、2012年3月)および、同「戦後教育改革期の未発行教科書『東洋の歴史』の内容構成について」(『歴史教育史研究』第10号、歴史教育史研究会、2012年12月)を参照されたい。

¹³ 「昭和二十六年度以降使用図書検定受理種目」、1949年8月5日、文部省告示第165号(同日、『官報』第6768号)。「世界史」に関する記載は前年度と変更はない。

¹⁴ 「検定申請予定表」、1949年8月23日、文部省告示第170号(同日、『官報』第6783号)。9月30日までに文部省管理局教科書検定課への提出を求めている。

¹⁵ Weekly Report, 13 Oct. 1949, CIE Section, GHQ/SCAP Records (国立国会図書館憲政資料室、シート番号:CIE(A)00526)。以下、占領軍に関わる史料は、日付と国立国会図書館憲政資料室でのシート番号のみを記載する。

¹⁶ 『時事通信 内外教育版』第203号、1950年4月11日。ここで使用した「点」という単位は表に記載されていないが、記事本文中での表記に従った。

¹⁷ 文部省『昭和26年度使用 教科書目録 高等学校普通学科用』、1950年4月。

用されることとなった。

本稿で取り上げた3種の「世界史」教科書の英語原稿は、ここで述べた1951年度用の検定申請に関わる1950年のものと判断される。

2. 3種の世界史教科書の英語原稿

まず、当時の教科書検定における英語原稿がいかなるものであったのかについて確認する。

1948年4月の文部省『教科書検定に関する新制度の解説¹⁸』による説明では、審査は基本的に、①「原稿審査」、②「校正刷審査」、③「見本本審査」の3段階で行なわれた。①の「原稿審査」の手続きとして、審査料、審査申請書に加えて、「原稿」7部、「原稿の英訳」3部、「さし絵」1組、「体裁見本」1部の提出を求めている。「原稿の英訳」については、「いうまでもなく、適確であるように注意する必要がある」と述べている。また、「さし絵」は、「原稿に貼付することが望ましいが、さし入れの箇所を示して別にさし絵だけ取りまとめて提出してもよい。この場合、さし絵と原稿におけるさし入れ場所とに、その表題（英訳をつける）と番号とを明記しなければならない」と説明している。後述するように、「世界史」教科書の英語原稿の「さし絵」は「さし入れの箇所」を示し、「その表題」と「番号」が明記されている。

「原稿作製上の注意」として、紙の大きさや厚さなどが指定されている。「原稿」では字数と行数を指定し、表紙には「教科名・学校種別・学年だけを記載」することを求めている。「原稿の英訳」では「一行おきにタイプすること」、「和文原稿のページ数を欄外に明示すること」を求めている。後述するように、「世界史」教科書の英語原稿では表紙に「教科名・学校種別・学年だけを記載」してあり、「和文原稿のページ数を欄外に明示」してある。

また、「検定事務処理」として審査の方法が説明されている。①「原稿審査」は、「大体、調査員四名がこれに当」たり、原則として2週間以内で調査を終えて、その評定の平均点数をもとに検定委員会で合否を判定する。そして「原稿」と「原稿の英訳」を「司令部」に提出する。「司令部」から「校正刷作製」の許可が出たら、「校正刷」(3部)を提出する。②「校正刷審査」は、「校正刷」と「原稿」を照合調査した上で、「校正刷」2部を「司令部」に提出する。「校正刷」が「司令部」を通過し、「印刷許可」になったら、用紙が配当されて「見本本」(12部)を提出する。③「見本本審査」は「見本本」の照合と調査の上、教科書検定委員会の答申を経て、文部大臣が検定を行なう。

以上の説明によれば、CIE（「司令部」）では、「原稿」と「原稿の英訳」を用いた「原稿審査」、および「校正刷」を用いた「校正刷審査」が設定されている。基本的に各教科書の「原稿」と「原稿の英訳」、「校正刷」がCIEのもとに提出されることになる。

¹⁸ 文部省『教科書検定に関する新制度の解説』、年欠。「序」が1948年4月付であるので、この時期に発行されたものと判断した。以下の説明と引用は、本書3～9頁による。

ここで取り上げた3種の「世界史」教科書は、「原稿の英訳」のみが残されており、「原稿」と「校正刷」は確認できていない。

次に、3種の「世界史」教科書の英語原稿について確認する。

CIEの史料の中で、教育課 (Education Division) の教科書・教育課程係 (Textbooks and Curriculum Branch) の約100箱 (Box no. 5500-5600) に検閲に関係した非常に多くの教科書やその英語訳、関連する史料が収められている¹⁹。この中に、3種の「世界史」教科書の英語原稿が残されている (Box no. 5543)。

3種の「世界史」教科書の英語原稿は、目録 (カード) では次のように記載されている。

- ・「Social Studies, World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade, Vol. 1」 (July 1950)²⁰
- ・「World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade」 (Feb. 1950)²¹
- ・「World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade, A-B」 (July 1950)²²

なお、目録の記載と実際の英語原稿の表紙の記載とでは、後述するように表記に若干の違いがある。ただ、いずれにせよ、検定申請用の原稿であるため、「教科名・学校種別・学年だけを記載」したものである。そのため、3種ともに「(社会科) 世界史」、「高校」、「2~3年生用」であることを表題で示しているのみであり、執筆者名や出版社名等の記載は一切ない。

3種ともにタイプによる英語原稿であり、一部に手書きで記載がなされている。挿絵や地図については、原稿中にその「さし入れの箇所」を示し、「その表題」と「番号」が明記されている。ただし、挿絵や地図は収められていない。注記のある教科書では、注記の文も翻訳されており、また、系図や統計表などの関連資料、年表、索引なども基本的にすべて翻訳されている。史料の保存状態はあまりよいとは言えない。そのため、判読できない箇所も少なくない。

前述したように英語原稿に執筆者や出版社等の記載はない。ただし、その内容を実際に発行された「世界史」教科書と対照すると、それぞれの英語原稿は次の教科書の翻訳であると判断される。

「Social Studies, World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade, Vol. 1」 (July 1950) は、三上次男・尾鍋輝彦著の『世界史 上』と『世界史 下』 (中教出版株式会社) である。「World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade」 (Feb. 1950) は、

¹⁹ 次の目録を参照した。荒敬・内海愛子・林博史編『国立国会図書館所蔵 GHQ/SCAP 文書目録』第2巻 (CIE/民間情報教育局)、蒼天社出版、2005年。

²⁰ Social Studies, World History - Upper Secondary 2nd-3rd Grade, Vol. 1, [CIE(A)04197-04205]。

²¹ World History - Upper Secondary 2nd-3rd Grade, [CIE(A)04205-04212]。

²² World History - Upper Secondary 2nd-3rd Grade, A-B, [CIE(A)04212-04221]。

村川堅太郎・江上波夫著、史学会編『世界史』（山川出版社）である。「World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade, A-B」（July 1950）は、中屋健一・尾鍋輝彦著『現代世界のなりたち 上』と『現代世界のなりたち 下』（実業之日本社）である。それぞれの英語原稿については以下に述べる。

3. 「Social Studies, World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade, Vol. 1」 （July 1950）

この英語原稿は、三上次男・尾鍋輝彦著の『世界史 上』と『世界史 下』（中教出版株式会社）であることが確認できる²³。目録上は、「Vol. 1」とのみ記載されているが、上・下2冊本の原稿が収められている。

「Vol. 1」の英語原稿の構成は以下になっている。なお、鉤括弧（「 」）内の記載は発行された教科書での表記の引用であり、引用中のスラッシュ（/）は改行を示す（以下、同じ）。

- ・（表紙）：表題として「Social Studies/(World History)/for the 2nd (3rd) Grade/ of the Upper Secondary School/ Vol. 1」の記載あり。表紙の中部に手書きで「Revised by __ J __」（下線部のローマ字大文字 2 文字の判読不能）と「Non mandatory/ suggestions made/ in first copy」の記載、表紙の下部に手書きで「21 July 50/ Returned without action/ taken / (Vol. A, B)」の記載あり。
- ・「CONTENT」（「上巻の目次」）：1～2 頁（全 2 頁）。
- ・「ILLUSTRATION」（「図版目次」の「挿図」）：3～4 頁（全 2 頁）
- ・「Map」（「図版目次」の「地図」）：5 頁（全 1 頁）
- ・「Preface」（「はしがき」）：6～8 頁（全 3 頁）。日本語原稿 1～2 頁の記載あり。
- ・「How to Study World History Why Do We Study World History?」（「世界史の学び方」）：9～18 頁（全 10 頁）。日本語原稿 1～12 頁の記載あり。

- ・（本文）：19 頁～324 頁（全 306 頁）。日本語原稿 13～351 頁の記載あり。

- ・「Index (Vol. I)」（「索引」）：(1) ～27 頁（全 27 頁）。
- ・「Chronological Table」（「年表」）：9 枚。

表紙を含めて全 352 頁と 9 枚

²³ 本稿で英語原稿との対照に利用したのは、具体的には以下の教科書である。①三上次男・尾鍋輝彦『世界史 上』中教出版株式会社、1951年6月15日発行、高社1113。②三上次男・尾鍋輝彦『世界史 下』中教出版株式会社、1951年6月15日発行、高社1114。なお、両書とも中表紙に「昭和26年 月 日」検定と記載されている見本本である（名古屋大学附属図書館所蔵）。また、以下の同書の検定済教科書も参照した（上越教育大学附属図書館所蔵）。③三上次男・尾鍋輝彦『世界史 上』中教出版株式会社、1951年7月23日検定、1952年3月5日発行、高社1113。④三上次男・尾鍋輝彦『世界史 下』中教出版株式会社、1951年7月23日検定、1952年3月5日発行、高社1114。書名は表紙、中表紙、奥付等で若干の差異があるが、教科書目録記載の表記とした。

「Vol. 2」の英語原稿の構成は以下のようになっている。

- ・(表紙) : 表題として「Social Studies/(World History)/for the 2nd (3rd) Grade/ of the Upper Secondary School/ Vol.2」の記載あり。表紙の中部に手書きで「Revised by __ J __」(下線部のローマ字大文字 2 文字の判読不能)と「Non mandatory suggestion/ made in first copy」の記載、表紙の下部に手書きで「21 July 50」の記載あり。
- ・「CONTENT」(「下巻の目次」) : 全 2 頁。
- ・「ILLUSTRATION」(「図版目次」の「挿図」) : 全 2 頁。
- ・「Map」(「図版目次」の「地図」) : 全 1 頁。

- ・(本文) : 1~221 頁 (全 221 頁)。日本語原稿 352~592 頁の記載あり。

- ・「Index (Vol. II)」(「索引」) : (1) ~19 頁 (全 19 頁)。
- ・「Chronological Table」(「年表」) : 9 枚。

表紙を含めて全 247 頁と 9 枚

英語原稿はタイプにより本文では 1 枚が 25 行を基本として記載されている。用紙の下部の中央に、「CONTENT」(「上巻の目次」・「下巻の目次」)から本文の最後まで通して番号が付けられている。その中で一部の章などでは別に番号が用紙の上部に付けられている。「Index (Vol. I) (Vol. II)」(「索引」)には、通し番号はなく、用紙の上部の中央に別に番号が付けられている。文章の左側に記載された日本語原稿での頁数は発行された教科書とは合致していない。

本書は 4 つの「単元」に分けられた 37 の「章」で構成されている(章によっては下に「節」を設けている)。各章の文は、いくつかの項に分けられ、発行された教科書ではその題目が小見出しとして太字で記されている。英語原稿での項の記載方法が統一されておらず、いくつかの形式が章ごとに混在している。具体的には、下線を引いたもの、括弧で括ったもの、四角で囲んだもの、何も付けていないものなどがある。翻訳あるいはタイプの担当者による違いであろう。なお、原稿の順番が前後している箇所もあり、英語訳原稿作成時の混乱がうかがえる。

「地図」や「挿図」の図版は、本文の該当箇所に表題とその番号が四角で囲って表示されている。この原稿の「地図」や「挿図」そのものは CIE の史料に残されていない。発行された教科書を見ると、おおむね該当の箇所に英語原稿での記載通りに掲載されている。

英語原稿は一部に保存状態から読み取りのできない箇所がある。そのため、発行された教科書の記載との厳密な対象はできないが、英語原稿と教科書の記載は基本的に一致している。「Index (Vol. I) (Vol. II)」(「索引」)も日本語の索引の英語訳である。残された英語原稿には検閲による削除修正などの指示の記載はない。ただし、一部に

文の修正、掲載された「参考書」の異同、注記の有無の違いなどが確認できる。また、英語原稿での年代表記の誤りもある。中国史の用語は漢字の中国語読みで掲載している。一方で、朝鮮史の用語は漢字の日本語読みで掲載している。なお、発行された教科書では、辛亥革命後の中国人名の読み仮名を上日本語読み、下に中国語読みで記載している。

英語原稿の「Vol. 2」には、文部省から CIE に原稿を送ったときの原稿送付票 (MS. FORWARDING SLIP) が挟み込まれている。3 種 5 冊の英語原稿の中で原稿送付票が残されているのは、この「Vol. 2」だけである。これによると、「Japanese Ms.」(日本語原稿)「1」部、「English Ms.」(英語原稿)「2」部、「Illustrations」(図版)「1」部が、「1 FEB 1950」(1950 年 2 月 1 日)に送付されている。この日付等に関しては後述する。

4. 「World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade」(Feb. 1950)

この英語原稿は、村川堅太郎・江上波夫著、史学会編『世界史』(山川出版社)であることが確認できる²⁴。

本書の英語原稿の構成は以下のようになっている。

- ・(表紙)：表題として「World History/ High School/ 2nd, 3rd Year Class」の記載あり。表紙の下部に手書きで「Returned _____」(下線部の判読不能)の記載あり。
- ・「PROSPECTUS」(「本書使用の先生方に」)：全 3 頁。
- ・「CONTENTS」(「目次」)：全 5 頁。
- ・「ILLUSTRATION」(「挿図目次」)：全 9 頁。
- ・「Preface」(「序」)：1~4 頁 (全 4 頁)。日本語原稿 1~5 頁の記載あり。

- ・(本文)：全 514 頁。日本語原稿 6~540 頁の記載あり。

- ・「Chronological Tables of the World History」(「世界史年表」)：全 10 頁。
- ・「REFERENCE MATERIALS for Further Study」(「参考資料」)：全 14 頁。
- ・「INDEX」(「索引」)：全 1 頁 (表紙のみ)。

表紙を含めて全 561 頁

²⁴ 本稿で英語原稿との対照に利用したのは、以下の教科書である。村川堅太郎・江上波夫著、史学会編『世界史』山川出版社、1951 年 1 月 1 日発行 (三重大学附属図書館所蔵)。なお、本書の表紙の裏には「この本は、教科書として発行されたものではありませんが、内容は、文部省検定済のものと全く同じであります。」と記載されている。準教科書として使用されたものである。なお、1952 年度用の検定教科書としては、以下の「改訂版」が使用された。村川堅太郎・江上波夫・林健太郎著、史学会編『改訂版 世界史』山川出版社、1951 年 7 月 23 日検定、1952 年 3 月 5 日発行、高社 1118 (静岡大学附属図書館所蔵)。

英語原稿はタイプにより本文では1枚が23～25行を基本として記載されている。通しの番号は付けられておらず、本文においても章ごとに用紙の下部、上部、右上部に番号があるか、もしくは章によっては全く付けられていない。日本語原稿の該当頁は「Preface」（「序」）から本文の最後まで、右側に手書きで記入されている。発行された教科書の頁とは合致していない。

残された英語原稿には、手書きでの綴りの修正、語句の修正・挿入が多くみられる。これは、検閲による削除や修正などの指示ではなく、英語の修正であると考えられる。

「挿図」は、本文の該当箇所に表題とその番号（1～225）が四角で囲って表示されている。この原稿の「挿図」そのものはCIEの史料に残されてはいない。発行された教科書を見ると、おおむね該当の箇所に英語原稿での記載通りに掲載されている。

英語原稿は一部に保存状態から読み取りのできない箇所がある。そのため、発行された教科書の記載との厳密な対照はできないが、英語原稿と教科書の記載は基本的に一致している。ただし、各章ごとの「Review」（「復習」）、「Study」（「研究」）という課題、掲載された「Reference Books」（「参考書」）には一部に異同が確認できる。中国史の用語は漢字の中国語読みで掲載している。数少ない朝鮮史の用語も基本は中国語読みで書かれている。

また、英語原稿での「PROSPECTUS」（「本書使用の先生方に」）、「CONTENTS」（「目次」）、「ILLUSTRATION」（「挿図目次」）、「Preface」（「序」）という順番は、発行された教科書では異なっている。教科書では、「序」、「目次」、「挿図目次」の記載の後に本文となっており、冒頭にあった「本書使用の先生方に」は、「索引」と奥付の間に1枚（1頁）がさしこまれる形で頁番号もなく掲載されている。この「本書使用の先生方に」は、この教科書の目標や構成などの説明に加えて、「単元設定の一例」を掲げたものである。検定教科書になると間もなく削除されてしまうことになるが、この時点では冒頭に掲げられていたのが興味深い。

本書の本文は、特に時代を区分せずに19の「章」で構成されている（後に改訂版では、第Ⅰ部～第Ⅲ部に分けられる）。章の下はいくつかの「節」に分けられ、その下の項は太字で表記されている。英語原稿での項の表記は、改行して示したものと下線を引いて示したものとが章ごとに異なる。また、一部の章では英語ではない歴史用語に下線がある場合もある。複数の担当者による違いであろう。また、「REFERENCE MATERIALS for Further Study」（「参考資料」）の一部や「Chronological Tables of the World History」（「世界史年表」）は手書きで作成されている。「INDEX」（「索引」）は表紙のみである。ここには、「translation omitted/ see the original text」（訳文省略。原文を参照のこと）と書かれている。本書の「索引」は、東洋史の内容を含めて人名・地名その他の用語に英語や中国語などでのローマ字の表記を添えていたための省略と考えられる。

5. 「World History - Upper Secondary 2nd- 3rd Grade, A-B」 (July 1950)

この英語原稿は、中屋健一・尾鍋輝彦共著『現代世界のなりたち 上』と『現代世界のなりたち 下』（実業之日本社）であることが確認できる²⁵。

「A」の英語原稿の構成は以下のようになっている。

- (表紙) : 表題として「WORLD HISTORY/A/Upper Secondary School/Second, Third Year」の記載あり。表紙の上部に手書きで「Revised by __ J __」（下線部のローマ字大文字 2 文字の判読不能）と「Non mandatory/ suggestions for changes/ made in first copy」の記載、表紙の下部に手書きで「21 July 50/Returned without action taken/ (Vol. A, B)」の記載あり。
 - 「Preface」（「まえがき」）：全 3 頁。
 - 「CONTENTS」（「目次」）：全 4 頁。
 - (本文) : 1~443 頁 (全 433 頁)。日本語原稿 1~ (?) 頁の記載。
- 表紙を含めて全 441 頁

「B」の英語原稿の構成は以下のようになっている。

- (表紙) : 表題として「WORLD HISTORY/B/Upper Secondary School/Second, Third Year」の記載あり。表紙の上部に手書きで「Revised by __ J __」（下線部のローマ字大文字 2 文字の判読不能）と「Non-/ mandatory suggestions/ made in first/ copy」の記載、表紙の中部に手書きで「21 July 50」の記載あり。
 - 「CONTENTS」（「目次」）：全 2 頁。
 - (本文) : 1~280 頁 (全 280 頁)。日本語原稿 1~ (209) 頁の記載あり。
 - 「Reference Books For Advanced Studies」（「参考書」）：281~287 頁 (全 7 頁)。日本語原稿 210~ (213) 頁の記載あり。
 - 「Chronological Table」（「年表」）：288~313 頁 (全 26 頁)。日本語原稿 214~ (250) 頁の記載あり。
 - 「INDEX」（「索引」）：314~326 頁 (全 13 頁)。日本語原稿 251~ (?) 頁の記載あり。
 - (裏表紙?) : 手書きで「APPROVED TEXTBOOK MSS/Japanese-English/1950/WORLD HISTORY/Grade 10-12」の記載あり。
- 表紙を含めて全 329 頁

²⁵ 本稿で英語原稿との対照に使用したのは次の教科書である。①中屋健一・尾鍋輝彦『現代世界のなりたち 上』実業之日本社、検定・発行年月日空欄、高社 1111。②中屋健一・尾鍋輝彦『現代世界のなりたち 下』実業之日本社、検定・発行年月日空欄、高社 1112。なお、両書とも中表紙に「昭和 26 年 月 日」検定と記載されている見本本である（愛知教育大学附属図書館所蔵）。

英語原稿はタイプにより本文では1枚が22～23行を基本として記載されている。「A」と「B」の2冊において別々に本文の用紙の下部に通しの番号が付けられ、「B」では、本文に加えて「INDEX」（「索引」）の最後まで続いている。日本語原稿の該当頁は章の始めのみに記載されている。ただし、発行された教科書の頁とは合致していない。

挿絵（「Fig.」）や地図（「Map」）には「A」と「B」において別々に通し番号が付けられて、その掲載の箇所に表題が記されている。ただし、図版一覧はない。発行された教科書にも図版一覧はない。

本書は、3つの「部」に分けられた32の「章」で構成されている。第1部と第2部が上巻、第3部が下巻になる。章の下に節はなく、各章はいくつかの項に分けられている。英語原稿では項は、改行して下線を引いて示されている。項の示し方に例外はない。英語原稿の「CONTENTS」（「目次」）において、「第2部 近代」（Part II The Modern Age）の15の章に対して、第1～10章を「Europe」（ヨーロッパ）、第11～13章を「America」（アメリカ）、第14～15章を「Asia」（アジア）と記載し、本文中でも第1章、第11章、第14章のはじめに「Europe」、「America」、「Asia」と書き添えてあるが、発行された検定教科書ではこのような分け方をしていない。

英語原稿はほぼ発行された教科書の翻訳になっている。この英語原稿への削除や修正の跡は認められない。ただし、一部に「Note」（「注」）が削除されていたり、各章ごとの「Aid to Topical Studies」（「課題」）および末尾の「Reference Books For Advanced Studies」（「参考書」）や「Chronological Table」（「年表」）にはいくつかの異同があったりすることは確認できる。中国史の用語は漢字の中国語読みで掲載している。朝鮮史は漢字の中国語読みを基本としつつ、朝鮮語読みもなされている。

6. 3種の「世界史」教科書に対する検定の経緯

前述のように、この3種5冊の「世界史」教科書を含めて合計「7点」の「世界史」教科書が検定を受けたが、1950年4月までに検定に合格して6月に開催された教科書見本展示会に間に合ったものはなかった。そのため1951年度用の教科書目録に「世界史」は1冊も記載されなかった。この「7点」が本稿「2」で述べた検定のどの段階にあったのかが問題となる。

少し後の時期になるが、1950年4～5月の時点でのCIEの史料では、「教科書検定委員会」に検定申請で提出された「7点」の「世界史」教科書の原稿のうち、「2点」が出版社に戻され、「5点」がCIE教育課のもとに提出されていたことが表中で報告されている²⁶。つまり、「7点」のうち、「5点」は日本側の「教科書検定委員会」を通過して

²⁶ Weekly Report, 20 Apr. 1950 [CIE(A)00573] および Weekly Report, 25 May 1950 [CIE(A)00581]。双方の報告書に検定申請に出された教科書原稿の処理状況を示した表が掲載されている。表中の数字の単位についての注記等はないため、当時の報道等で使用されている「点」を仮に当てた。「7点」の「世界史」教科書原稿が申請され、「5点」が「教科書検定委員会」を「合格（passed）」して、CIEのもとにあること（With CIE）を示している。残りの「2点」は、「Weekly Report, 20 Apr. 1950」の表では、「出版社に戻された」（Returned to Publisher）と表示し、「Weekly Report, 25 May 1950」

いたことが確認できる。なお、CIEに提出されなかった「2」点がいずれの教科書であったのかは不明である。この「2」点が上・下2冊の1種の教科書を意味しているのか、あるいは1冊ずつの2種の教科書を意味しているのかも不明である。また、CIEに提出された「5」点というのは、英語原稿が残されている上・下2冊の2種（中教出版と実業之日本社）と全1冊の1種（山川出版社）の合計3種「5」冊を意味していると考えられる。

本稿「3」で紹介した『世界史 下』（中教出版）の英語原稿には、原稿送付票が残されている。これによると1950年2月1日に文部省からCIEに「日本語原稿」1部と「英語原稿」2部が送付されたことが確認できる。『世界史 上』（中教出版）の「はしがき」は、「1950年1月²⁷」付で書かれているので、原稿完成後ただちに検定申請に提出したものであろう。他の「世界史」教科書の英語原稿に原稿送付票は残されていないが、CIEに提出された他の原稿も同様の時期であったと推測できる。

そして、1950年4～5月の時点で「5」点は、CIEにおいて「Passed」（合格）でも「Failed」（不合格）でも、さらには「Passed with Changes」（修正により合格）でもなく、「5」点すべてが、ただ「With CIE」と、CIEのもとにある旨を記号で示している²⁸。膨大な数の教科書検定に対処していたとはいえ、2月から4月（もしくは5月）までの期間であれば、CIEでの「原稿審査」に1冊の「世界史」も合格とも不合格とも判定されていないほうが不自然である。全体で言うと、5月の時点で日本側の「教科書検定委員会」を通過してCIEに送られた「818」点のうち、「10」点がCIEのもとにある（「With CIE」）。その「10」点のうち、算数・数学（全「153」点）で「2」点（中学校数学）、音楽（全「73」点）で「1」点（小学校音楽）あり、残りは日本史（全「2」点）で「2」点（中学校日本史）、世界史（全「5」点）で「5」点（高校世界史）である²⁹。すなわち、CIEにおいて歴史の教科書がすべて留め置かれた状態になっていた。

CIEはなぜ「世界史」を含めた歴史教科書に対して合格とも不合格とも判定しなかったのか。その詳細は不明であるが、参考になるのは、この当時に検討されていた「世界史」の要綱（「アウトライン」とも呼ばれていた）である。これは「世界史」学習指導要領が完成する前に、教師向けの参考として用意が急がれていたものであった。早くも1949年6月には具体的に話題となっている³⁰。この「世界史」の要綱は、ようやく1950年2月20日のCIEと文部省の担当者での会議で、いくつかの修正とともに承

の表では、「出版社により引きあげられた」（Withdrawn by publisher）と表示している。この「2」点に対する具体的な措置ははっきりしないが、双方の表ともに、「教科書検定委員会」での「不合格」（Failed）には数えられていない。

²⁷ 三上次男・尾鍋輝彦・前掲『世界史 上』（1951年6月15日発行、見本本）、8頁。

²⁸ Weekly Report, 20 Apr. 1950 [CIE(A)00573] および Weekly Report, 25 May 1950 [CIE(A)00581]。

²⁹ Weekly Report, 25 May 1950 [CIE(A)00581]。

³⁰ Report of Conference, 6 May 1949 [CIE(D)01786]。文部省の保柳睦美がCIEのオズボーンに「世界史」要綱のための用紙の割り当てを求めている。

認されて、文部省から各県の教育委員会あてに通達として送付することが許可された³¹。そのため、文部省から高校に対しても、3月6日の通達「中等社会科の改訂單元について」で、「日本史」と「世界史」は「できるだけ近いうちに、これらの要綱を公表する予定」と予告した³²。「世界史」実施2年目になる1950年4月の新学期開始の時期には通達として公表する予定であった。しかし、すぐに通達が出されることはなかった。

この遅れの原因は、CIEの中等教育の担当者が許可を出した後に、CIE内で最終的な原稿審査をしていた審査委員会(review committee)が差し止めていたためであった³³。

差し止めていた理由は明言されていない。文部省にいた箭内健次は、当時のCIEについて、「私ら(引用者注:箭内のこと)のときには努めて責任回避というか、非常に消極的になって、なにか腫れものにさわるような傾向が非常に強くなってきたんです。…とにかく歴史というものに対する恐怖というか、極端に敬遠しておったですね」と回想し、『くにのあゆみ』に対するソ連などからの批判や「例の西洋史のあの問題」が背景にあったのではないかと述べている³⁴。

特に、この時期は、1949年10月の中華人民共和国の成立から、1950年1月の米国内務長官アチソンのアジアにおける共産主義封じ込めの演説、1950年6月の朝鮮戦争勃発に至る東アジアで激化する東西対立という国際情勢のもとにあった。他の連合国さらには米国内から非難を受ける恐れがあり、極めて注目を集めやすい歴史教科書の許可や不許可に対して、その責任を取るべき占領軍として非常に慎重になっていたものと見なすことができる。1946年発行の『くにのあゆみ』は他の連合国からの多くの批判を受け、1947年発行の『西洋の歴史(1)』は米国内から連合国軍総司令官に対する批判を受けたいきさつがあった³⁵。以上のように東西対立の進展や米国内の事情が、「世界史」要綱の発表を停止させていた³⁶。

このような政治状況のもとで、CIEにおける「世界史」教科書の原稿審査も進められていた。日本側を通過した「5」点の「世界史」教科書原稿を、CIEが合格とも不合格ともせず、そのまま留め置いたのは、基本的にCIEが責任を回避したためである

³¹ Report of Conference, 20 Feb. 1950 [CIE(B)06659]。

³² 「中等社会科の改訂單元について」、1950年3月6日、文初中第105号。引用は、文部省大臣官房総務課・前掲『昭和二十六年三月 文部行政資料 終戦教育事務処理提要 第五集』(400頁)による。なお、この通達の内容は、「一般社会」「人文地理」「時事問題」を対象としていた。

³³ Report of Conference, 20 Mar. 1950 [CIE(A)02937]。「何週間も (for a number of weeks) 審査委員会のもとにあった」と記されている。審査委員会については、片上宗二『日本社会科成立史研究』(風間書房、1993年、919頁)を参照した。

³⁴ 「座談会 終戦後十一年を顧みて」(『日本歴史』第100号、日本歴史学会、1956年10月、26頁)。

³⁵ 文部省『くにのあゆみ 上・下』(日本書籍、1946年9月5日翻刻発行)に対する日本の内外からの批判については、片上宗二・前掲『日本社会科成立史研究』が整理している(359～362頁)。また、前掲『西洋の歴史(1)』をめぐる問題については、茨木智志・前掲「中等社会科「西洋史」教科書『西洋の歴史(2)』の英語原稿についての基礎的考察」が整理している。

³⁶ 結果的には1950年9月になってようやく公表された(「高等学校社会科世界史の学習について」、1950年9月22日、文初中第495号)。

と見なすことができる。

7. 3種の「世界史」教科書に対するその後の措置

その後、占領軍による教科書検閲が廃止された。1950年7月にCIEから文部省に対して、「文部省が教科書発行の許可・不許可の責任を持つ」こと、すなわち教科書に関わる占領軍の検閲の廃止が通知された³⁷。このことは8月に教科書会社に連絡され³⁸、正式には9月に指令として日本政府に通知された³⁹。

占領軍の教科書検閲廃止の時点で、「5」点の「世界史」教科書原稿をCIEから文部省に戻したと、1950年7月27日に報告されている⁴⁰。3種の「世界史」教科書の英語原稿の表紙に書かれた「21 July 50」（1950年7月21日）や「Returned without action taken」（未処理にて返却）はこのときのことを表わしている。

この報告書には、「5」点の教科書のうち、すでに読んだ「4」点には示唆した修正を付けて戻し、まだ読んでいない「1」点には出版社が望むならば、中等教育係が他の「4」点と同様の審査（review）をすると記して戻したと報告されている。また、同じ報告書の別な箇所では、「引用した通告（引用者注：CIEの教科書検閲の廃止）に考慮して、まだCIEの手もとにあるすべての教科書原稿は文部省に戻されている。歴史教科書の場合、CIEのコンサルタントが記載した修正の示唆（suggested changes）は強制的なものと考えないように、出版者に注意されている⁴¹」と報告されている。英語原稿の表紙に書かれた「Non mandatory/suggestions for changes/made in first copy」などという、修正の示唆は強制的なものではない旨の記載はこのことを指していると判断できる。ただし、「first copy」がこの英語原稿を指しているのか否かは明確ではなく、同様に、「Revised by __ J __」（下線部のローマ字大文字2文字の判読不能）の意味しているものも確認できていない。

同じ1950年7月27日の報告書で、文部省が「世界史」教科書の3つの出版社との会議を行なって、1950年度の残りの期間と1951年度において「補助教材」（supplementary texts）として利用できるような方策を検討する計画を立てていると記載されている⁴²。

1950年「秋」から⁴³、「この本は、教科書として発行されたものではありませんが、

³⁷ Weekly Report, 27 Jul. 1950 [CIE(A)00596]。

³⁸ 水谷三郎・前掲『教科書懇話会の歴史』、46～47頁。以後の教科書検定の申請には、教科書の英語訳原稿の提出が不要となった。

³⁹ 「日本の教育制度の管理に関する最高司令官閣指令AG第三五〇号（昭和二十年十月二十二日）（CIE）の適用について」、1950年9月18日、（文部省大臣官房総務課・前掲『昭和二十六年三月 文部行政資料 終戦教育事務処理提要第五集』、722頁）。

⁴⁰ Weekly Report, 27 Jul. 1950 [CIE(A)00596]。

⁴¹ Ibid.

⁴² Ibid.

⁴³ 「世界史」とは書かれていないが、「女子高校・中学教諭」の中村一朗は、昭和「二十五年秋」（1950

内容は、文部省検定済のものと同じであります。」という注意書きのある書籍（準教科書）が発行されるようになった⁴⁴。要するに、検定済教科書ではないが、内容は検定済教科書と「全く同じ」という注意書きである。実に不可解な記載であるが、ここで報告されている文部省と3つの出版社の会議での検討の結果、「世界史」教科書が存在しない状況を何とかするために考えられた「方策」であった。

この3つの出版社がいずれのものかの記述はない。また、正式な検定済教科書ではないので、『官報』等での掲載もない。ただし、当時、準教科書として『世界史研究 上・下』（柳原書店、1950年）を発行していた広島史学研究会の1950年11月発行の雑誌に次のような記事がある。

現在までの所では文部省の検定に合格した世界史教科書は、東大の村川・江上両氏のもの（山川出版）、中屋健一氏のもの（実業之日本社）、尾鍋・三上次男両氏のもの（中教図書）の三種だけです。これらは27年度〔引用者注：昭和27年度。1952年度〕から教科書として使用出来、26年度〔引用者注：昭和26年度。1951年度〕は参考書として使用されるものと思います。…⁴⁵

引用の後半の1951年度は「参考書」、つまり準教科書として使用され、1952年度から「教科書」、つまり検定済教科書として使用されるという記述は、事実として正確なものである。注目すべきは、1950年11月発行の時点で、山川出版社、実業之日本社、中教出版の3種の「世界史」教科書が「文部省の検定に合格した」と記している点である。この3社が前述した文部省の計画していた会議の「世界史」教科書の3つの出版社と判断できる。実際の1952年度用の「世界史」教科書の正式な意味での検定年月日は異なるが⁴⁶、当時においては「文部省の検定に合格した」と言われていたことを

年秋）から昭和「二十七年度〔引用者注：1952年度〕検定本と同一内容」と称する教科書が数種出ていることを述べている（中村一朗「社会科としての歴史教育—教師の立場から—」『世界歴史事典月報』第2号、平凡社、1951年8月、6頁）。

⁴⁴ この注意書きの記載が確認できた教科書には、以下のようなものがある。①村川堅太郎・江上波夫著、史学会編・前掲『世界史』（山川出版社、1951年1月1日）②村川堅太郎・江上波夫・林健太郎著、東京大学文学部内 史学会編『改訂版 世界史』山川出版社、1951年6月11日発行（和歌山大学附属図書館所蔵）。③村川堅太郎・江上波夫・林健太郎著、東京大学文学部内史学会編『改訂版 世界史』山川出版社、1951年7月16日再版発行（佐賀大学附属図書館所蔵）。他にも、少なくとも中教出版、実業之日本社の「世界史」にこのような注意書きのある教科書があると考えられる。また、「中学校社会科日本史」用では、次のものにこの注意書きがあることが確認できている。④東京文理科大学歴史研究会（代表・小葉田淳）『私たちの歴史 上巻・下巻』愛育社、1951年1月15日。表紙に「御審査用見本」の印がある（東京大学教育学部図書室所蔵）。

⁴⁵ 「世界史研究」編集部「〔世界史教科書検定について〕」（『月刊世界史研究』第8号、広島史学研究会、1950年11月、29頁）。

⁴⁶ 山川出版社、実業之日本社、中教出版の3種の「世界史」教科書の検定は、1951年7月23日付で出されている（1951年9月26日、文部省告示第48号。同日『官報』第7415号）。なお、このときの検定は約1170冊の教科書がまとめて「検定を与え」られたものであるため、それまでに審査を終

示している。

さらに言えば、この3社は、CIEに残されている3種の「世界史」教科書の英語原稿の出版社とも一致している。

以上をまとめると次のようになる。日本側の「教科書検定委員会」での審査を通過した「5」点の「世界史」教科書原稿は、1950年2月頃にCIEに提出された後に合格とも不合格とも示されないままに留め置かれたために、4月発行の1951年度用教科書目録への登載に間に合わず、6月の教科書見本展示会にも提出されなかった。それは、当時のアジアでの東西対立の激化を背景とした政治状況の難しさを背景に、CIEが「世界史」教科書への可否の判断を下す責任を回避したためであった。そして7月に占領軍による教科書検閲の廃止を受けて、CIEの手もとにあった「5」点の「世界史」教科書の原稿は文部省に返還された。文部省はその「5」点の3つの出版社である山川出版社、実業之日本社、中教出版と協議して、正式な「世界史」教科書が存在しない状況に対処するために、「この本は、教科書として発行されたものではありませんが、内容は、文部省検定済のものと全く同じであります。」と記載させて、文部省の了承のもと非公式な「世界史」準教科書を発行させた。このような流れになる。

おわりに

CIE史料に残された3種の「世界史」教科書の英語原稿に対する考察を通じて、①この3種は山川出版社、実業之日本社、中教出版のものであること、②この3種は日本側の「教科書検定委員会」での審査を通過していたこと、③この3種が1951年度用教科書目録には掲載されなかった理由は、CIEが責任を回避するために原稿を留め置いた結果であること、④その後、この3種は文部省の公的な了承のもとで非公式な準教科書として発行されて、一般的には検定に合格したと見なされていたことなど、1950年実施の「世界史」教科書検定に関わるおおまかな経緯が確認できた。

ただし、教科書原稿の内容に関わる検討やこのときの「世界史」教科書検定が「世界史」や社会科の教育に及ぼした影響の検討などには考察が至らなかった。今後の課題としたい。

付記

史料の読解についてご教示を頂いた上越教育大学のアイヴァン・ブラウン氏に感謝を申し上げます。また、教科書の調査にご協力を頂いた各大学附属図書館に感謝を申し上げます。

えたものを形式的に同日付の検定として告示したものと考えられる。